

中谷 稔氏 阿部株式会社元従業員

「今治タオルの始祖」と言えば、阿部平助。この阿部平助が1896年に起業して設立したのが阿部(株)である。阿部(株)は、戦前から今治綿織物業を支えてきた老舗企業のひとつであり、綿織物とタオルの製造をおこなってきた。しかし、安定成長期に入った頃より主力の綿織物の需要が減少し、また経営上の問題を抱えて、1970年代後半に存続の危機を迎えた。そして残念なことに、1982年、阿部(株)は他企業に全株式を売却し、長い歴史に幕を閉じた。



中谷 稔氏




その後、他企業のもとで綿織物とタオル製造は継続されたが、阿部(株)にとって激動の時期をもっとも近くでみつめてきた人物が、中谷稔氏である。キリスト者でもある中谷氏は、阿部平助とも通ずる。今治タオルの歴史に名を刻む阿部(株)の最後の様子を、中谷氏の人生とともに振り返る。

なかたに・みのもる ☆ 1934年、東京都大田区蒲田矢口渡生まれ。父親が鉄道省の官僚であったため、幼少の頃は東京と各地を転々とする。戦災と父親の死をきっかけに、1946年、家族と今治に移住し、同年4月から愛媛県立今治中学校へ入学。愛媛県立今治西高等学校、大阪市立大学商学部（夜間）をへて、1952年に岩田商事(株)に就職。1954年の同社破産後、阿部(株)大阪支店に入社。1982年の阿部(株)の最後を見届けたのち、阿部(株)の事業を引き継いだトウヨテリー(株)に勤務し、2004年に現役を引退。

1. 幼・少年時代

戦災と父親の死が、わたしを今治に導いた

中谷稔氏の父・信之氏は、戦前、鉄道省工作局の官僚で国鉄  に勤めていた。その関係で、中谷氏は4人兄弟姉妹の長男として東京都大田区蒲田の矢口渡^{やぐちのわたし}で生まれ、その後、1938年の幼稚園入園時に大宮（埼玉県）、1940年の小学校1年入学時に多度津（香川県）に引っ越し、ほぼ2年毎に東京と地方を転々とした。今治へは、小学校1・2年を過ごした多度津時代に、家族と一緒に訪れたことがある。中谷氏にとって、これが最初の今治となった。

中谷氏の祖母である梅代^{うめよ}の姉末^{すえ}が、阿部平助の実弟・光之助の長男の陽太郎に嫁いでおり、現在の広小路にある今治郵便局あたりに邸宅を構えていた。この周辺は、戦火ですべて焼けてしまったが、その前に中谷氏は家族そろって阿部陽太郎の邸宅を訪問していた。

阿部光之助は、兄の平助とともに1896年に阿部合名会社を設立し、伊予綿ネル業組合の組合長に就任するなど実業界で活躍し、また初代今治町長や県会議員も務め、今治の地域経済の発展に貢献した人物である。



中谷氏が生まれた1934年は、1929年の世界恐慌、1931年の満州事変、さらには先進諸国における帝国主義の高揚とブロック経済化によって、日本をとり巻く政治および経済情勢がいよいよ悪化の一途を辿っていった時期であり、1941年には太平洋戦争が勃発した。

父の信之氏は、第二次世界大戦中、陸軍執政官としてフィリピン



誕生して間もない0歳の頃

（写真：中谷稔氏提供）

のマニラに派遣され、マニラ鉄道を管理する任務に就いていた。マニラは、日本の南洋諸島を統括する重要な拠点であり、戦争末期には連合軍との激戦地ともなった場所である。父親の同期には、1924年に鉄道省に入省した佐藤栄作  と1925年におなじく鉄道省に入省した島秀雄  がいる。とくに、佐藤栄作とはある時期家族ぐるみの付き合いがあり、佐藤栄作の息子の洋服のおさがりを中谷氏がもらったりしていたそうだ。

日本に残された母親と4人の子供たちは、戦中も東京と地方をいったり来たりした。中谷氏自身は、1942年に明石（兵庫県）の人丸国民学校の3年に編入し、1944年にふたたび東京に戻って調布大塚国民学校の5年生に編入した。その後、終戦間際の1945年3月から5月に調布大塚国民学校から20数名で静岡県田方郡の伊豆畑毛温泉に集団疎開し、同年6月から9月には岩手県紫波郡の陰里寺に集団疎開した。そして、




4歳の頃の写真


（写真：中谷稔氏提供）

終戦直後の1945年9月末に、東京の田園調布に戻った。中谷家の本籍は田園調布にあり、祖父の才治が勤めていた三菱を退社した際に田園調布に居を構え、それ以来一家はここに住んでいた。

戦場に赴いていた信之氏は、終戦をマニラで迎え、無事日本に帰国したものの、東京に帰ってから1週間後に42歳の若さでこの世を去った。幼い4人の子供を残しての病死だった。父親の死は、一家の生活を一転させ、母親も子供たちもその後の生活に苦労を強いられた。田園調布の家は戦災で焼かれ、父親が病死したことで、家族5人は父親の生まれ故郷の今治に1946年2月に引き揚げ、新しい生活をスタートさせた。こうして、戦災と父親の死が、12歳を迎えたばかりの中谷氏を今治に導いたのである。

中谷氏は、今治市立常盤小学校6年の3学期から転入し、その数

ヶ月後、受験して愛媛県立今治中学校  へ入学した。入学と同時に新聞配達をはじめ、それからおよそ6年間、朝の4時から6時までの2時間、毎日欠かさず働いた。月2,000円のアルバイト代だったが、当時の社会人の初任給が5,000円だったことを考えると、母親を含めた一家5人の生活費の足しにはなった。母親は、阿部(株)から綿織物の半反物を譲ってもらい、それを売って生計を立てた。阿部(株)とはこの頃からの付き合いで、中谷氏が阿部(株)のために最後まで尽くしたのは、恩返しの意味もあった。

高校は1949年の高等学校再編成により設立された愛媛県立今治西高等学校  に学び、卒業後の1952年4月、大阪市立大学商学部の夜間部に入学すると同時に、大手繊維問屋の岩田商事(株)に入社した。(次号につづく)